

シェリング『自我について』における

新プラトン主義的思想の再検討へ

——最初期のシェリングの「上昇」概念を契機として——

高木 駿

序

本稿の目的は、『自我について』¹ (1795) における「上昇 Aufsteigen ないし Erhebung」²概念を再吟味することで、「超越論哲学」³というこの著作に固有のあり方を確保し、「超越論哲学」としてのこの著作における新プラトン主義的思想の再検討を要求することにある。

現代の新プラトン主義者であるバイヤーヴァルテスは、新プラトン主義的な理解によってドイツ観念論一般を徹底的に捉え直すという意図の下で、「シェリングの芸術哲学を新プラトン主義的な文脈において理解することは……事実的にも、歴史的にも正当化される」⁴と、芸術哲学期のF. W. J. シェリングの思想を新プラトン主義的思想であると洞察している。この理解は、第一章で見られるように、シェリングの芸術哲学期の代表作である『ブルーノ、あるいは諸物の神的、自然的原理』(1802) (以下『ブルーノ』と略記) が持つ〈原型—イデア—産出〉という、まさに新プラトン主義的な「流出Emanation」の構造を持つことから、まったく適当であると思われる。こうした理解の背景には、「芸術哲学」期の基礎となる「自然哲学」期、更には最初期のシェリングの思想を新プラトン主義的に捉えるバイヤーヴァルテスの理解がある⁵。事実、彼の見解に基づき、最初期の著作である『自我について』に新プラトン主義的特色を見出そうと試みれば、それは、確かに大きな難もなく可能になるとと思われる。

ところで、彼がこのような見解の根拠の一つとするのは、『自我について』の「上昇」概念を新プラトン主義的と捉える理解である。けれども他方で、この概念は、シェリングがJ. G. フィヒテの初期思想から受け継いだ「超越論哲学」の方法であるとも理解できる。この二つの理解は、第二章で見られるように、その構造において、調和せずに背反してしまう。このとき、バイヤーヴァルテスの理解が妥当するとなると、「超越論哲学」の方法は否定され、『自我について』の「超越論哲学」というあり方は失われてしまうのではないだろうか。

以上の問題意識から、本稿の構成は以下ようになる。第一章では、バイヤーヴァルテスの見解を指針として、『自我について』に見出される新プラトン主義的思想を概観する。第二章では、そこに見出された「上昇」という新プラトン主義的思想に対するバイヤーヴァルテスの理解が、シェリングが「超越論哲学」の方法として用いる「上昇」概念と矛盾する点を明らかにする。そ

これから、「超越論哲学」としての『自我について』のあり方を確保し、この著作における新プラトン主義的思想が再検討される必要性を示したい。

1. 『自我について』における新プラトン主義的思想

1-1. 初期シェリングの新プラトン主義的な思想

シェリングの思想は、一般的に『自由論』(1809)の成立までが「初期」⁶と区分される。『自由論』ではプロティノスの『エネアデス』からの直接の引用があり⁷、そこでの新プラトン主義的な思想影響は疑いえないものと言えるだろう。それ以前に、そうした思想が最もまとまって見られるのは、やはり1802年の『ブルーノ』であると思われる。そのため、本節では、最初期の『自我について』に新プラトン主義的思想を見出すための導き糸として、まずは『ブルーノ』に見られる新プラトン主義的思想を見ていきたい。

周知のように、この著作は、『超越論的観念論の体系』(1800)から引き継がれた課題、つまり芸術の本質としての美を探求する。シェリングは、美を、永遠なる概念としての真理⁸、さらには「(美と真理という) ⁹最高の一性 die höchste Einheit der Wahrheit und der Schönheit」(IV, 226)¹⁰と同定する。この「最高の一性」は、「永遠なもの」として無時間的である「原型的自然 die urbildliche Natur」と規定され、それに対して、時間に依存する「無限なもの(思惟)」と「有限なもの(直観)」とは「産出的自然 die hervorbringende Natur」と規定される¹¹。芸術において、美そのものは永遠で無時間的である前者に、芸術作品の成立は時間に則って産出的である後者に対応することになるが、その両者は、それらの中間項としての「イデア的自然 die ideale Natur」を介してようやく関係することができるとされている¹²。すなわち、原型としての美は、イデアを介して、産出するものへ原型(自ら)を示し、産出するものがその原型を模す形で産出することを可能にしているのである。それによって、所産としての芸術作品が成立することになる。

また、同年の著作『哲学体系の詳述』(1802)では、「原型」は、一貫して「絶対者 das Absolute」と同定され、芸術において原型がイデアを介して産出するものに対して自身の模倣を可能とする事態は、絶対者がイデアを介して芸術作品という所産に現れ出る「流出」という事態を意味すると考えられる。こうした〈絶対者—イデア—産出〉という構造において、絶対者がその所産の内に現れ出るとする思想は、新プラトン主義¹³的特色を持つものであると言い得るとされる。

このように、『ブルーノ』における初期シェリングの思想には、確かに新プラトン主義的特色を見出すことができる。そして、そのあり方の骨子となるのは、今見たように、絶対者(原型)がその所産の成立を可能にする関係構造であると思われる。ところで、そうした構造をシェリングが、絶対的自我と経験的知との関係という形で、初めて明解に論ずる著作が『自我について』である。つまり、初期シェリングに見られる新プラトン主義的思想は、遡及的に最初期の著作である『自我について』の内に求められると考えられよう。そこで、次節では、その著作における当該の関係構造を概観し、そこに新プラトン主義的思想がどのように見出せるのかを検証していきたい。

1-2. 絶対的自我と経験的知

『自我について』のシェリングは、経験（経験的知）がいかんにして可能であるのかという、I. カントに由来する問い¹⁴を主題とし、経験的知を成立させる原理の規定を目指していく。ただし、その過程で、経験の成立を導く「アプリアリな総合命題はいかにして可能であるのか」というカント的な問いを、「いかんにして絶対的自我は、自己自身の外で、非我を自身に対して端的に反定立¹⁵するに至るのか」(I/1, 175) という、『全知識学の基礎』第一部（1794 以下『基礎』と略記¹⁶）におけるフィヒテの問い¹⁷へと転換している。ここでのシェリングは、後述するように、もはやカントからではなく、フィヒテから引き継いだ態度において、絶対的自我を最高原理として非我（経験的知）を説明しようと試みていると考えられる¹⁸。

さて、「まさに客観は……自我に反定立されたものとして、つまり非我としてのみ規定されうる」(I/1, 170) という文言から、非我は「客観」と、非我が反する *entgegen* ところの自我は、客観に対する *entgegen* 「主観」と規定される。そのため、非我が反定立されるときには、非我（客観）が反するところの自我（主観）が必ず先に定立していなければならない。故に、「絶対的自我が非我を反定立する」という事態は、絶対的自我が、まずは、主観である自我を定立し、次いで、それに対する（反する）客観である非我を反定立するという事態を意味することになる。すなわち、この事態の成立の根拠となりえるのは、非我の反定立ではなく、それに先立つ絶対的自我の定立となる。したがって、絶対的自我の定立に基づいて、非我の反定立が説明されるならば、先の問いは解決されることになると思われる。

絶対的自我が自らを自らによって定立するときには、自我は自らを自我として、つまり自らに同一のものとして規定するので、その自己定立の根底には「一切の定立の根本（源）」(I/1, 218) としての「(自我の) 純粹な同一性」(I/1, 216) があるとされている。それ故、絶対的自我は、その同一性 *Identität* ないし一性 *Einheit* が表れる「自我の源形式 *Urform*」(ebd.)、すなわち命題「自我＝自我（自我は自我である。）」(I/1, 218) に基づいて、自らを定立することになると考えられる。

それに対して、非我（客観）は「自我の内定立しうるものではない」(I/1, 223) と言われる限りは、自我の「外」に反定立されることになる。そのため、反定立が立脚する定式には、自我の定立に基づく定式「自我＝自我」とは別の定式「 $A \rightarrow \neg A$ 」(I/1, 222) があげられている。しかし、シェリングは、自我の「内」で非我が定立されえないことを述べた直後、なぜか「それでもやはり、非我は……自我の内定立されるべきである」(I/1, 223 傍点筆者) と主張してもいる。これは、一見、矛盾しているかのように思われるが、反定立に基づく定式「 $A \rightarrow \neg A$ 」を分析していくと、理解可能になると思われる。

定式「 $A \rightarrow \neg A$ 」は、なるほど確かに、 $\neg A$ が A の領域に含まれずに、その「外」にあることを規定するものである。しかし、 $\neg A$ は、そもそも A なしでは存在することはできないので、必ず A が定立していることを前提にしなければならない。つまり、この非我の反定立の定式は、必ず A の定立に依拠することになる。ここで、 A の定立は、一切の定立に基づく定式「自我＝自我」に従っているのだから、定式「 $A \rightarrow \neg A$ 」の定立それ自体も、定立の定式に従わなければならない。すなわち、非我が従う定式は、絶対的自我の自己定立の定式において成立することになり、非我が反定立されるところも、その定立の定式においてということになるだろう。すると、非我は絶

対的自我「において」、つまり自我の「内」で定立されると考えられるのである。

よって、定式「 $A \rightarrow \neg A$ 」に立脚する非我（客観）は、確かに、定立された自我（主観）を否定するものとして、その自我に反して、その「外」へ反定立されるのだけれども、その反定立が立脚する定式の定立それ自体は絶対的自我の自己定立の定式「自我＝自我」に従うので、非我の反定立は絶対的自我の「内」で定立されることになる。つまり、非我が関わる「外」とは、絶対的自我の端的な「外」ではなくて、むしろ、絶対的自我の「内」で定立した自我に対する限りでの「外」、要するに、絶対的自我の「内における外」を意味するものと考えられる。

したがって、『自我について』では、自我の定立も非我の反定立も共に、定式「自我＝自我」、言い換えれば、絶対的自我の同一性ないし一性に基づいて成立することになる。ここに来て、本節冒頭の問いに対しては、絶対的自我は自らの同一性に基づいて非我（経験的知）を反定立すると、差し当たって答えることができるだろう。すなわち、絶対的自我が経験的知を成立させる関係構造は、絶対的自我の（同）一性に基づくものであると理解することができるだろう。

1-3. なる絶対的存在からの「流出」とそこへの「上昇（回帰）」

前節では、絶対的自我が、経験を成立させる（同）一性を持った原理であることが確認されたが、シェリングは、この一性へ、もう一つの絶対的自我の本質規定を同定している。その規定とは、「唯一の実体」（I/1, 192）、「純粹で永遠な存在」（I/1, 202）そして「絶対的実在性」（I/1, 208）等の、絶対的自我の存在に関する規定である。

シェリングは、絶対的自我の存在を、絶対的自我が自身で「存在するが故に存在する」（I/1, 167）と定め、そのあり方を、自分自身に同一性ないし一性の形式を与えるあり方と同定している¹⁹。そのため、絶対的自我は、それ自らで存在するがために一であり、一であるがために存在していることになる。つまり、絶対的自我の「存在（実在性）」は、一性（同一性）と一致するもう一つの絶対的自我の本質規定になると考えられる。ここで、経験的知が一性を持った絶対的自我から導かれるという事態は、知が実在性を持った絶対的自我から導かれるという事態を意味することになるので、その二つの規定を本質とする絶対的自我は、経験的知の「単に形式的にすぎない原理」（I/1, 208）である「論理的自我」²⁰（ebd.）を越えて、知の存在をも可能にする存在する一なる原理となる²¹。

それ故に今や、絶対的自我は、一性と実在性（存在）とを同一にその本質とする、一なる絶対的存在と規定されてよいはずである。むしろ、他の規定によって絶対的自我を定めることは、その絶対性を損うものでさえあると考えなければならない。このとき、前節で見た、絶対的自我から経験的知という存在が導かれる事態は、一なる絶対的存在、つまり一者から知という存在が「流出」する事態であると理解できるだろう。加えて、シェリングが、そうして一者から生み落された存在、つまり「有限的自我」の「最後の目的」（I/1, 200）を、「無制限者（絶対的自我）との同一性へと自己を拡げていくこと」（ebd.）とする点には、有限者が、元来同一であった一者という絶対者へ戻っていく「上昇ないし回帰」という運動を理解することができるはずである。

したがって、『自我について』において、絶対的自我が、自らの一性と実在性に基づいて、知という存在を成立ないし産出させる過程には、一者からの有限者の「流出」というあり方を見出され、さらに、知という存在（有限的自我）が絶対的自我へと一致しようとする過程には、有限

者の一者への「上昇（回帰）」というあり方が見出されることになる。このように、『自我について』の思想の内には、バイヤーヴァルテスの見立て通りに、確かに新プラトン主義的思想が確認される。

2. 絶対なものへの「上昇」の内実

2-1. シェリングの「上昇」概念に対するバイヤーヴァルテスの理解

ここから注目したいのは、バイヤーヴァルテスが „Plotins Gedanken in Schelling” 「シェリングにおけるプロティノスの思想」において、『自我について』における「(有限者が) 無制限者(絶対的自我)との同一性へと自己を拡げていくこと」(ebd.)を「上昇(回帰)」と捉えた上で、「上昇というシェリングの根本思想は……プロティノスの根本思想との親和性を示している」(WS, 188)とする理解である。すなわち、ここでの彼は「流出」というよりも、「上昇」を根拠として、この著作の内に新プラトン主義的思想を見出そうとしている。これは、どういった事態なのであるのか。

差し当たって、「シェリングとプロティノスは、有限的自我が絶対的自我へと上昇するという点、ないし推論的な思惟が、思惟の内で作動している無時間的なヌースとしての、最も深く自らと一致する思惟へと自己変成するという点において、言うなれば、感性と有限性からの解放を目指す根本運動において一致している」(WS, 189)という、彼の主張が収斂する文言に着目したい。ここでは、有限的な知の存在が絶対的自我へと「上昇」する事態が、「推論(推理)する思惟 das diskursive Denken」²²が「無時間的な思惟(ヌース) das Denken des zeit-freien Nus」へと「変成 Transformation」する事態でもあり換えられている。

ところで、「推論する思惟」と「無時間的な思惟」とは何か。まず、後者は、引用文中で「絶対的自我」と対応していることや、他の箇所でも「魂そのものの根源」(ebd.)、さらに「絶対的なヌース」(ebd.)と同定されることから、絶対的自我にあるものとして理解することができる。次いで、前者は、引用文の「有限的自我」に対応することや、無時間的な後者と対になっていることから、「推論する有限的な思惟活動」として理解することができるだろう。ここで、「推論」とは、カントの『純粋理性批判』以降、低次の命題をより高次なものへと上がっていくあり方とされる²³ため、「推論する思惟活動」は、制約され有限である低次の命題の系列をより高次へと推論する形で上り、最高で無制約な絶対的なもの²⁴へと至る活動として規定することができる。すなわち、「推論する思惟活動」は、有限的な命題の系列を自ら上ること、つまり推理することによって、自らを絶対的なものへと高め、自らを「無時間的な思惟」へと「変成」させていくのである。したがって、バイヤーヴァルテスは、『自我について』における、有限なものの一なる絶対的な存在(絶対的自我)への「上昇」を、以上の「推論的な上昇」として捉えていることになり、そうした上で、その運動を一者へと帰るプロティノスの、つまり新プラトン主義的な「根本運動」と規定していることになるだろう。

さて、『自我について』において、有限なものへの絶対的なものへの「上昇」が初めて語られるのは、「私は……まさに制約された最下位の命題から無制約なものへと上がっていくことができなければならぬ」(I/1, 169 傍点筆者)という文言においてである。この文言から、シェリングが

「上昇」を、まさに有限的自我の命題がより高次なもの（無制約な絶対的自我）へと上がっていくあり方、つまりカント的な「推論」と理解していることがわかる。そして、彼は、このいわば「推論的 diskursive 上昇」を、「(この書の) 哲学が可能となるために……一つの最高原則（絶対的自我）を……前提」(I/1, 164)する方法として捉えるので、この「上昇」は、有限的自我から絶対的自我へと上がることで、絶対的自我を前提するという役割を担い、絶対的自我を頂点とする『自我について』の哲学体系を成立させる核心的な方法であることになる。すなわち、「推論的上昇」は、この著作の体系を作り上げるための要であり、『自我について』に最も根本的で特徴的な概念の一つであると考えられる。

結局のところ、バイヤーヴァルテスは、このシェリングの「推論的上昇」概念を新プラトン主義的な「推論する思惟」として捉えていたことになるだろう。ここで、今見たようにこの「上昇」概念が『自我について』の根本的な思想であることを考慮すれば、彼がこの著作に新プラトン主義的思想を見出す際、「上昇（回帰）」というあり方に根拠を置く理由が見えてくるはずである。つまり、彼は、『自我について』の根本とも言える、有限的なものの一なる絶対的存在への「推論的上昇」を新プラトン主義的思想と捉えることを通して、この著作、すすんで当時のシェリングの思想を根本から新プラトン主義的なものと解釈することをねらっていると考えられる。故に、彼が、この著作の内に新プラトン主義的思想を見出すところは、前章で述べた「流出」ではなく、主として「上昇（回帰）」となるのである。

2-2. シェリングの「上昇」概念に対するもう一つの理解

バイヤーヴァルテスは、以上のように『自我について』の「(推論的) 上昇」概念を新プラトン主義的な「上昇（回帰）」として理解すると考えられるが、この理解の妥当さを評価する前に、シェリング自身の「(推論的) 上昇」概念について、より踏み込んだ分析が必要であると思われる。というのも、このシェリングの「上昇」概念には、新プラトン主義的ではない、それに固有の内実が別に考えられるからである。

既述のように、シェリングが「制約された最下位の命題から無制約なものへと上がっていくこと」(I/1, 169)と規定する「推論的上昇」は、制約された知から無制約な最高原理（絶対的自我）へと上がることで、それを前提ないし規定し、『自我について』の哲学体系を成り立たしめる方法であった。しかし、実はこの方法はシェリング自身のものではなく、『基礎』のフィヒテから引き継いだ方法と考えられる。ではまずは、そのフィヒテの方法を簡単に確認したい。

『基礎』のフィヒテは、絶対的原理を導く（規定する）際に、経験的な意識の事実を出発し、そのような経験的なことを成立させる「第一根本命題 (Ich bin Ich.)」へ、さらにそれを自身の「事行」によって可能とする無制約なもの、つまり絶対的自我へと遡る方法を取る²⁵。それによって、経験的なものを可能にする限りでの絶対的自我が規定され、この著作の思想が体系化されることにもなる²⁶。要するに、この方法は、経験的なものから無制約である絶対的自我へと上り、絶対的自我を規定する、しかも経験的（被制約的）なものを可能にする限りのものとして「超越論的」に規定することによって、その著作の「超越論哲学」という体系を成立させる方法なのである。フィヒテ自身はこの方法の名を明確に定めてはいないが、W. ヤンケに即せば²⁷「超越論的反省」²⁸と規定することができる。

この「超越論的反省」に対して、『自我について』の「推論的上昇」は、先述のように、経験的なものから絶対的（無制約的）なものを推論的に導くという特徴において、既にかなり強い親和性を示していると言えるだろう。さらに以下の点で、この親和性は決定的なものとなる。それは、経験的な知から「推論的上昇」によって見出された無制約なもの（絶対的自我）は、それと同時に経験的な知へと下降しなければならないとされる点である²⁹。このとき、絶対的自我は必ず経験的なものを導かなくてはならないので、もっぱら経験的なもの（有限的自我）を可能とする限りのものとしてのみ見出され、規定されることになる。このときの規定こそが、前章で見た、絶対的自我の「実在性（存在）」と「同一性（一性）」という規定と考えられるだろう。すなわち、「推論的上昇」は、単なる絶対者への「上昇」ではなく、絶対的自我を、経験を可能にするものとして規定する「超越論的」方法となる。ここに来て、シェリングの「推論的上昇」は、経験的なもの（有限的自我）から無制約なもの（絶対的自我）へと上り、絶対的自我を「超越論的」に規定することでもって、その著作の体系を成立させる方法と捉えられ、フィヒテの「超越論的反省」との親和性は決定的となる³⁰。

したがって、『自我について』における、経験的なものから絶対的自我への「推論的上昇」は、フィヒテの「超越論的反省」と同様に、絶対的自我をあくまでも経験を可能にする限りのものとして規定する上り道となる。そして、この「超越論的」な方途によって『自我について』は、『基礎』が「超越論的反省」によって「超越論哲学」という体系を得るのと同じく、「超越論哲学」という哲学体系を形成することになるだろう。以上のように、『自我について』の「上昇（回帰）」概念には、それに固有の「超越論哲学」の方法として内実が実際に見られることになったわけだが、このあり方を新プラトン主義的思想として解することは、以下に述べる点で困難であると思われる。

2-3. 背反する二つの理解

ここまでの考察から、『自我について』における「推論的上昇（回帰）」概念の理解には、経験的なもの（有限的自我）が無制約で絶対的なもの（絶対的自我）へ帰ることに本質を見るバイヤーヴァルテスの「新プラトン主義的理解」と、経験的なもの（有限的自我）が自身を可能とする限りでの絶対的自我へと至ることに本質を見るフィヒテ起源の「超越論哲学的理解」とがあることが明らかとなった。しかしながら、これらの理解は相反する構造を持っている。

まず、前者の理解に立つならば、絶対的自我という絶対的で一なる存在が、必ずそこから生み出される有限的自我という経験的知の存在に先立つことになる。これは、その先後が逆となるときの不都合を考えればわかりやすい。つまり、先後が逆であれば、有限的なものにとっては自らが帰還するところがまだないことになり、帰ることそのものが成立しなくなるのである。そのため、この理解では、どうあっても「絶対的自我→有限的自我」という順序を取らねばならなくなる。これに対して、後者の理解に立つならば、経験的知が、必ず絶対的自我に先立つことになる。この場合には、絶対的自我はもっぱら経験を可能にするものとしてのみ、「存在」と「一性」とを持つと規定されるため、それを「超越論的」に規定する立ち位置、つまり経験的なものの存在を出発点としてまずもって思考しなくてはならない。そのため、この理解においては、先の理解とは逆に、「有限的自我→絶対的自我」という順序を取らねばならなくなる。これらの二つの理解は、

絶対的自我と有限的自我との先後という点において、互いに背反することになり、同時に成立することは不可能となる³¹。

そして今や、これら二つの理解のどちらを選考するのかを考えねばなるまい。仮に、バイヤーヴァルテスの理解、つまり「新プラトン主義的理解」が妥当するとすれば、『自我について』は「批判主義（超越論哲学）Kritizismus」ではなく、新プラトン主義的ないしスピノザ主義的である「教条主義 Dogmatismus」の著作となり、フィヒテ的な「超越論哲学」という個性は薄れることになる。確かにシェリングは、1795年2月のヘーゲル宛の書簡³²において『自我について』の思想過程をスピノザに引きつけて開陳しており、この点では「教条主義」への接近を理解することもできるだろう。けれども、実際にこの著作において、その態度が明確に顕示、支持され、「批判主義（超越論哲学）」が廃棄されることはなかった。それよりもむしろ、第一章第二節や前節で見たように、そこには、フィヒテに由来する「超越論哲学」の方法と思想とが主として展開されていたのである。そのため、『自我について』のシェリングの主たる立場は、そうした「教条主義」ではなく、「批判主義（超越論哲学）」であることになる。

したがって、『自我について』の「推論的上昇（回帰）」概念に関する二つの理解の内では選択されるのは、後者の「超越論哲学的理解」であるべきと思われる。このときには、背反関係にある「新プラトン主義的理解」の成立は主としては難しくなると思われる。

結

以上のことから、『自我について』の「(推論的) 上昇」概念を、有限的自我の絶対的自我への帰還という新プラトン主義的運動として見なすバイヤーヴァルテスの理解は、この著作を「超越論哲学」と捉える限りでは、難しくなると思われる³³。しかし、この理解が難しいと批判的に主張することは決して非生産的ではない。むしろ、それにより、その「上昇」概念が「超越論哲学」の方法として理解され、この著作の「超越論哲学」としてのあり方が、毀損を免れ、存続することが確保されるのである。すなわち、この著作のシェリングは、まだ完全な形での新プラトン主義的ないしスピノザ主義的な思想を持ってはいないのであって、あくまでも「超越論哲学」の思想を持っていると結論されるのである。

以上の結論が導かれたのだが、この先、『自我について』に見出される「流出」という、もう一つの新プラトン主義的思想に再び目を向ける必要が生じてくる。というのも、この「流出」を「上昇（回帰）」から分離して考えることは難しく、今見たように「上昇」概念の新プラトン主義的特性が否定されることになれば、「流出」概念についても再び検討がなされなくてはならないからである。したがって、本稿の考察は、この著作の「上昇」概念に対する新プラトン主義的理解を以上のように批判することを通して、「流出」という思想をも含めた、この著作の内に見出されるとされる新プラトン主義的思想全体に対して再検討を要求することになる。そして、まさにこうした再検討が実際に遂行されて初めて、「超越論哲学」としての『自我について』が持つ「新プラトン主義」が、その真相を現すことになると思われるのである。

¹ この著作の本来の題は *Vom Ich als Princip der Philosophie oder über das Unbedingte im menschlichen Wissen* である。以下の引用は全て、F. W. J. Schelling *Ausgewählte Schriften Band 1*, Suhrkamp, 1985. に収録のものからであり、訳出は邦訳の『シェリング初期著作集』、日清堂書店、1977 に収録の『哲学の原理としての自我について』（高月義照訳）を参考にしつつ、筆者自身が行った。なお、本稿におけるシェリング著作の引用表記は全て F. W. J. von Schelling, *Sämtliche Werke*, hrsg. von K. F. A. Schelling, 1856/61. に準拠するものとする。

² 本稿では、Aufsteigen も Erhebung と同様の「上昇」として理解する。これは、「推論的な思惟」が「推論」という形で「上に登ること Aufsteigen」を「上昇 Erhebung」と見なす、„Plotins Gedanken in Schelling” のバイヤーヴァルテスの理解と同じ前提を共有するためである。

³ ここでの「超越論哲学」とは、後述するが、カント哲学ではなく、『基礎』のフィヒテの「超越論哲学」を意味する。

⁴ W. Beierwaltes, *Einleitung zu Texte zur Philosophie der Kunst* (『芸術哲学のテキストへの準備』), Stuttgart, Reclam, 1982, S.5, ff.

⁵ W. Beierwaltes, *Das Wahre Selbst*, Vittorio Klostermann GmbH Frankfurt am Main, 2001. に収録の„Plotins Gedanken in Schelling” (『シェリングにおけるプロティノスの思想』) を参照。以下、この著作の引用表記は、WS という著作の略記に、頁数を加えて表すこととする。

⁶ 初期思想は、超越論哲学期から自然哲学期へ移行し、さらに芸術哲学、同一哲学期へと展開していく。

⁷ シェリングは「プロティノスは、根源的な善が質料と悪とへ移行することに細かい議論を重ねているが、それでは不十分である」(VII, 355) と『エネアデス』を参照しつつ述べ、それを補填する形で自身の思想を展開していく。

⁸ IV, 225, ff.

⁹ 引用文中の(丸括弧)は注記がない限り、前後の文脈から筆者が補填したものである。

¹⁰ 『ブルーノ』の引用は、Phb 版の F. W. J. Schelling, *Bruno oder über das göttliche und natürliche Prinzip der Dinge*, 2005 からである。

¹¹ IV, 223-227, ff.

¹² IV, 225, ff.

¹³ もちろん、ドイツ観念論の系列における「新プラトン主義」とはプロティノスから直接に読み込まれたものではない。当時の「新プラトン主義」には、いわゆる人文主義時代の思想家 N. クザーヌスや G. ブルーノ、そして B. d. スピノザからの影響が発展されながら色濃く反映していると考えるのが一般的であろう。その中でも特に、シェリングやフィヒテにとって、スピノザ主義の新プラトン主義的思想は決定的であったように思われる。

¹⁴ I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, B19, ff. (以下 KrV と略記)

¹⁵ 『自我について』では(entgegen)setzen と(Anti)Thesis という術語が使用されている。もちろん、「措定」と「定立」という訳し分けは可能と思われるが、本稿はそれらを共に「定立」と訳し、明らかな他の使用例がない限りでは、同義として理解することにする。というのも、主にフィヒテの『全知識学の基礎』の用語使用に従う『自我について』では、それらを訳し分ける必要性があまりないように思えるからである。

¹⁶ 本稿で扱う『全知識学の基礎』は、1794年の夏に配布されたものであり、『基礎』との略記は「第一部」のみを指す。この理由は以下の通りである。フィヒテは1794年暮れに、はじめて『基礎』をシェリングに送り、シェリングは1795年1月に受け取ったことをヘーゲルに知らせている。その翌月、シェリングは『自我について』の構想をヘーゲルに書簡で知らせている。つまり、シェリングの『自我について』に影響を与えるのは、『全知識学の基礎』の「第一部」のみということになる。ゆえに、本稿ではその「第一部」のみを扱う。引用とその表記は SW 版に従い、邦訳は『フィヒテ全集・第四巻「初期知識学」』（哲書房、1997年）に収録の『全知識学の基礎』（隈元忠敬訳）の「第一部」を参照する。

¹⁷ 『基礎』のフィヒテは、「第三根本命題」に言われる「(絶対的)自我は、自我の中で、可分的な自我に対して、可分的な非我を反定立する」(I, 110) というテーゼの探究をこの著作の主題としている。

¹⁸ シェリングは、1794年のフィヒテ宛ての書簡において、『基礎』への感嘆と賞賛を送り、自身の論文を添えて教を乞うている (Vgl. *J. G. Fichte Briefwechsel*, hrsg. von Hans Schulz, 2 Bde, Leipzig, 1930.). この事実から、『基礎』からの強い影響がシェリングにあると理解することは適切であると思われる。

¹⁹ I/1, 178, ff.

²⁰ 「論理的自我」が述べられる直前では、「私は思惟する」という命題、つまりカントの「経験的統覚」が主題となっている。そのため、「論理的自我」とは Ich denke, dass ... という命題の主文に置かれ

る形式的な自我を指していると考えられる。

²¹ 「……究極的（絶対的）根拠は、……存在の原理と思惟（知）の原理とが合致するものである」（I/1, 163）

²² das diskursive Denken は δίαλογος の独語訳であるが、本稿では、それを、「命題を駆使し、時間的に遡ること」、つまり「推理ないし推論する思惟活動」であると理解する。そのため、diskursiv の邦訳には「論証的な」ではなく、「推論（推理）する」という語を当てている。

²³ KrV の B388 から、カントは無制約なものへの「推論」の内実として「上昇 Aufsteigen」をあげている。

²⁴ カントの「無制約的 unbedingt」と「絶対的 absolut」が実際には異なる意味を持つとする、G. シェーンリッヒの最近の議論は興味深いものと思える。それが敷衍されれば、シェリングにおける「無制約者 das Unbedingte」と「絶対者 das Absolute」の定義に関しても大きな変更が余儀なくされるだろう。しかし、『自我について』では、それらの語の使用がそもそも明瞭ではない以上、厳密な区別を設けることは困難である。そのため、本稿では、それらの語の差異の可能性を周知としながらも、それらをほぼ同義として理解する。

²⁵ Vgl. I, 91-92. また、『フィヒテ 存在と反省—批判的理性の基礎 上』（W.ヤンケ著、隈元忠敬、高橋和義、阿部典子訳、哲書房、1992年）、25頁、参照。

²⁶ W. ヤンケもこの方法が体系形成の方法であると理解している（同上）。

²⁷ 同上、27頁、参照。

²⁸ カントの「超越論的反省」では、客観的に認識可能な対象は感性に限定されることになり、Ich を存在するものと客観的に規定し、認識の可能の根拠とすることは「誤謬推理」へと至ることになる。カント的な「超越論的反省」で行き着けるのは、Ich ないし Ich bin Ich.（「絶対的自我」）ではなく、Ich denke, dass ...（「超越論的統覚」）に過ぎない。つまり、カントの「超越論的反省」とフィヒテのそれとは内実を異とすると考えられよう。

²⁹ 同上、27頁、参照。

³⁰ 『自我について』には、「(推論的) 上昇」のあり方をシェリングの最初期の「反省」と捉える先行研究があるものの（Vgl. *Reflexion und Erfahrung Eine interpretation der Früh- und Spätphilosophie Schellings*, Christoph Wild, Freiburg/München, 1968, S. 19-25.）、「反省 Reflexion」という語は一度も登場しないので、シェリングの「(推論的) 上昇」がフィヒテの「(超越論的) 反省」と一致するとまでは言い難いと思われる。しかし、既述のように内的な親和性が極めて高いのは確かである。

³¹ ここでの二つの理解に伴う「先後関係」の問題は、確かに存在の序列、認識の序列と整理することができるとは思えない。しかし、『自我について』の「存在ないし実在性」が、本性上の「存在」ではなく、カント、さらにフィヒテが扱う「カテゴリー」に基づく「存在」である以上は、ここではやはり認識の序列が主として問題になるべきであるように思われる。この意味でも、この著の「上昇」概念について「新プラトン主義的理解」を示すのは難しいだろう。

³² Vgl. *Briefe von und an Hegel, Bd. 1*, hrsg. von Johannes Hoffmeister, Meiner, Hamburg, 1952, S. 22. 『自我について』の刊行は1795年の復活祭の時期であるので、その数ヶ月前の書簡ということになる。

³³ 『自我について』には、「超越論的に規定された絶対的自我から導かれた有限的自我に対して「(絶対的自我と) 同一になれ、汝の本質の主観的な形式を……絶対者の形式へと上昇せよ」(I/1, 199)と命ずる言明のような、「推論の上昇 Aufsteigen」とは異なったニュアンスの「上昇」を表す箇所が存在する。そのため、そこには「推論」とは関係しない「上昇 Erhebung」の仕方が、一見、考えられそうではある。しかし、シェリング自身が、この「上昇」を、絶対者への単なる「無限に続く接近」(ebd.)として有限的自我の完遂されえない歩みであると定義しているため、この「上昇」は、結局のところ、完結しえない思想と考えられ、それをこの時点で積極的に見出すことは難しいと思われる。